



Vol.48

弁護士 岸田鑑彦
杜若経営法律事務所

★働き方改革を従業員の目線でみる

残業時間の上限規制問題を考えるとき、必ず出てくるのが「生産性の向上」というキーワードです。

生産性を向上させて残業時間を減らしていこう、ということとはよく理解できても、個人的にはあまりピンときていませんでした。ただそのことが少し理解できたエピソードがあったので、ここで紹介させていただきます。

先日、ある保険営業マンのアシスタントをしておられる女性の講演を聞く機会がありました。30歳くらいで、何度かの転職経験のある方でした。

彼女のことをよく知る周りの経営者は、口をそろえて「ぜひうちの従業員として来てほしい」ということを言っています。私は、彼女との接点がありませんでしたので、なんと

なく、そうなんだろうなあとは思っていましたが、講演を聞いてなるほどと思いました。

何度か転職をしてきた彼女。あるとき、今の雇い主である営業マンと出会います。それまで大手企業で勤務してきた彼女が、なぜ転職を決断したのか。

この営業マンの一言、「俺はトップを取りたい。だからその手伝いをしてもらえないだろうか。」これがきっかけでした。

その言葉を聞いて、彼女は、「この人のために仕事がしたい、この人を支えたい」と本気で思ったそうです。

もちろん、今の仕事のすべてが順風満帆ではなかったようですが、その都度、彼女は乗り越えてきました。

そんな彼女が仕事をするうえで信じていることが4つありました。その中の1つが、「嫌だと思ふことも、とりあえずやってみる。」です。

なぜ彼女がそう思えるようになったか。

それは上司である営業マンが、本気で彼女のことを成長させたいと思っているから、そして成長した姿をみて本気で喜んでいるから、さらにそのことを彼女自身も知っているから。

だからこそ嫌な仕事であっても意味があるからやる、この人がどうしたら困らないか、今どうしてほしいかという気持ちを汲み取り先回りして対応する、指示されたことしかできなかつたのが、こうした方が良いのではないかという提案ができるようになる。

でも土日の休日出勤はなく、残業もほとんどない。

この関係性をわずか3年で築き上げたのです。

経営者としての強い信念と揺るがない自信、それを実践する姿を見せること、そして周りの人の成長を純粋に喜べること。

それぞれ家庭の事情や働く意味は違えども、この会社のために、この社長のためにと、思って働くことで、人はすごく成長するということ。

これこそが生産性なのだ。

私自身の生産性の原点は、終始一貫、「今この瞬間にできること、今日できることは、先に延ばさない」です。

どうせいつかやるなら、やろう・やれると思った瞬間が一番速いです。ただ、業務量の増加により徹底できていない部分も実際にあります。来年はこの初心を忘れず、生産性を常に意識しながら、業務に取り組んでまいりたいと思います。